
境界扉-kyokaihi-

KO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界扉 - k y o k a i h i -

【Nコード】

N 4 8 9 4 D

【作者名】

K O

【あらすじ】

一人の少年が、一人の赤い少女に振り回される、一話完結の少し怖いお話です。

壱話

俺が奇怪な出来事に多く遭遇するようになったのは高校に入学して一人の少女に出会ったのがきっかけであつた。

俺こと倉御三笑が地元鎌久矢の県立鎌久矢高等学校に入学したのは今年の四月である。入学してからは友人の誘いでライトスポーツ愛好会たるものには所属しているものの、それも週に一回か二回集まって様々なスポーツを楽しもうというものだったので、俺はほとんど帰宅部状態だつた。かといって勉強にいそしんだ訳でもなく、特に何をしているわけでもなかった。ただ、興味を持っているものはあつた。オカルトである。オカルトと一口で言つても多くの分野があるが、俺が好んだのは呪いや幽霊といったものであつた。

俺は高校に入るまではこの趣味については物足りない思いをしてきたふと物心ついた時から俺はこの手のものに興味を持っていた。何故好きになつたかは覚えていない。昔からテレビでその手の番組があれば必ず見ていたし、その系統とおぼしき図書室の本は全て読んでいたと思う。俺が物足りない思いをしてきた一つに、趣味を共有できる人間が周りにいなかったことがある。探せばいたのかもしれないが、俺はそこまで社交的ではないし、変な奴と思われたくもなかった。なので自分から行動を起こそうとはしなかった。高校に入つて初めて同じ趣味をもつ者を見つけた時は、それだけで高校は中学までと違っているんな人がいるものだと思つたほどである。反面、ネットの掲示板にはよく顔をだした。そこなら趣味が同じ人しか集まらないので、はばからずに自由に語り合えた。それでも、心霊スポーツ突撃などのオフ会に出るほどやはり社交的ではなかったし、一人でその手の場所に行けるほどの度胸もなかった。なので、やはり趣味に關しては物足りない思いをしていた。

しかし興味があるだけで俺は呪いや幽霊といったものがあるかどうかは半信半疑だったし、いわゆる靈感というものもなかった。そう、変にかなり興味をもっているものの、そこまで踏み込んでおらず、実に中途半端な位置にいたのだ。交霊術だの百物語だの、やってみたいといえびやってみたいし、人の目に触れられない闇というのも見てみたいという人一倍好奇心は持っていたと思う。要は引き込んでくれる人がいなかったのだ。一人では何もできなく、反面好奇心だけは持っている俺は実に中途半端で、物足りない思いをしていた。そんな俺を、一気にそっちの世界に引きずり込んだのが、一人の赤い少女だった。

五月の中旬頃だったと思う。その日は七限目の授業を終えて俺はやることもなく帰路につこうとしていた。しかし何故かその日はすぐに家に帰る気がしなかった。そこでなんとなく学校周辺を探索してみることにした。地元の学校とはいえ、家からは自転車で二十分はかかるところだ。まだ俺にとって未開の地であることに等しい。何か面白い場所でもないかと学校周りを一人でうろつくことにした。その日は五月とは思えないほど空気は冷えていて、空は雨こそ降りそうにないにしろ、灰色の曇が空をおおっていてどこか無気味であった。三十分位うろついたら、人気のない神社を発見した。鳥居の奥にそんなに狭くもない境内を持ち、正面には本殿がみえ、右手奥には御神木らしき大木があった。こんなところに神社なんかあったのかと思いつつ鳥居をくぐった。そこで一休みでもしようかと自転車をとめようとしたところ、先客をみつけた。その先客は俺と同じくらいの歳だろうが、赤で統一された服装をしていて、顔の整った少女だった。彼女は御神木とおぼしきものをしげしげと眺めていた。その様子は何とも言えず不気味に思えた。やがてこちらに気付いたのか、俺の方になにやら微笑んできた。瞬間、怖気がはしった

のを覚えている。同時にこの灰色の空のもと、彼女が着ていた赤色が新鮮な“何か”に思えた。気持ち悪くなり、一休みするのはやめてそのまま家路についた。

翌日、学校で昨日のことを席が後ろである黒瀬に話した。この黒瀬こそ、俺が初めて見つけた同じ興味をもつ友人である。ちなみにこの高校というのは本当に規則というものが無い学校であり、まず制服はない。校則も特にない。それでも一応進学校である。そんな高校に俺が入学したのはただ単に家から近かったただけだ。

「そりゃあ変わった人に会ったものだね、クラサン。」
クラサンというのは俺の愛称である。

「あれを変わっているといわずに何を変わっているというんだよ。御神木を眺めてるなと思つたら、いきなりこつち向いて笑つてきたんで驚いたよ。服装も真赤で変だったし。」

「うちは私服だからこの高校の生徒かもね。」

そついう彼の服装は見事に毎日モノクロである。色だけなら毎日葬式にでれる。

「あんな真赤ならすぐわかるだろ。黒瀬は何かそんな人が生徒にいないか聞いてないか？」

「えーと……聞いたことはないな。でも一咲あたりに聞けばわかるかも。」

確が一咲というのは彼の所属している部活の部員で、女子のほうの学年委員長だったと思う。黒瀬本人はそんなに広い人脈を持っていないが、人脈が広い人と親しく付き合っている。そのため情報というものに明るい。一咲というのもその一人だ。この学校は共学校だが男女別学であり、男女は南校舎と間に管理棟をはさんで北校舎に分断されている。昇降口も別だ。委員会や部活にでも入らないとあまり異性に関われないのである。そうでもない人はそうでもないんだろうが。あいにく俺はそうでもない人ではなく、所属しているラ

イトスポーツ愛好会というのも、もともと内輪で作った新興の愛好会なので互いに仲の良い男子のみで構成されている。故に女子の方には一切縁がない。故に俺は女子生徒の情報など調べようがない。なんとなくあの赤い女が気になったので黒瀬に調べてもらうことにした。

この日は例の愛好会の活動があるので、そのあとにもう一度神社に行くことにした。黒瀬もその愛好会の一員なのでそのことを言うたら、

「俺も一緒にいっていい？ やっぱ気になるし。まあその御神木になにがあるのか大体見当はついてるけどな。今日もその人がいるかもしれないし、行くだけ行ってみようよ。」

やはり、彼も気になるようだ。

今日も昨日と同じで、寒く、灰色の空が広がっており、灰色の風景は陰鬱なものだった。あの日はあたりをうろついていたから高校からつくのに時間がかかってしまったが、実際は十分もかからない場所に例の神社はあった。鳥居をくぐり、自転車を停める。今日は誰もいないようだ。相変わらず人気はない。二人で一通り神社を見て回った後、最後に御神木を見た。木は太く、背こそは高くはないものの枝を広く伸ばして辺りを覆っており、人気のないのも手伝ってひどく不気味に思えた。

「はん、やっぱ予想通りあったね。」

木を見た瞬間、ニヤリとしながら黒瀬は言った。見ると釘で打ち付けたと思わしき傷跡があった。跡は大体ここ一年位以内のものだと思われた。

「跡は古くもないけど新しくもないな。この平成の世にそんなことをする人がいたとはねえ。驚きだ。」

世に有名な、丑の刻参りというやつである。夜、憎い相手の体の一部やその名前を入れた藁人形を木に打ち付けるアレだ。

「こんなの効果あるものなのかね。呪われた人がそのことを知れば効果はあるんだろうけど……。迷信に頼ってまで呪いたいっていうのは分らないな。」

あきれ顔で黒瀬が言う。

「試してみる？ 今日からでもお前を呪って試してみてやるよ。」

「チキンなクラサンに夜な夜なそんなことできるか。それより例の赤い少女もこれを見てたみたいだな。やっぱりこんな跡気になるよな。俺らと同類かもね。」

「藁人形がないのはそいつが引っこ抜いたからじゃねえの。そんな奴は俺らと同類じゃなくて酔狂だ。」

「もの好きという点では変わらないよ。」

そんなことを言いながら黒瀬と別れて帰路についた。誰かに見られていたような気がするのは気のせいだったろうか。

翌日、黒瀬に件の少女のことを聞いたがまだ分からないとのこと。

その日の帰り道も神社によってみたが、赤い少女はいた。俺は話しかける気にもならず、ただ遠目に確認しただけにした。なにか気になる。

その翌日、他の友人達にも聞いてみたが知らないとのこと。何故だか気になるということをついたら、それは恋だと言い返された。絶対に違う。

初めてあの神社によつた日からちょうど一週間が過ぎた。その間、気になって帰る際には神社を見てから帰るようになっていた。赤い少女は毎日いた。その日も帰る際、神社に寄った。天気は一週間前から曇っており、寒波に覆われているらしく肌寒かった。すっきりしない気持ちで神社を見ようと鳥居まで近づいた時、「キミ、」と

話しかけられた。見れば鳥居のところに赤い少女が立っている。

話しかけられた瞬間、正直俺は心臓が止まるかと思った。まさかあちら側から話しかけてくるとは思わなかったからだ。いや、向こうも当然ながら気が付いていたであろう。一週間前に会ってから何故か毎日神社前を通り過ぎるようになった人がいれば。突然話しかけられてパニックしている俺にもう一回向こうは「キミ、」と話しかけてきた。

「はい？」何故か俺はかしこまっていた。

「そう驚かなくてもいいじゃない。それよりこの神社に何か用でもあるのかイ？一週間前からよく見かけるんだけど。あいにくボクも高校に入ってからこの神社に来るようになったから、この社務所のない神社のことはよくわからないんだ。」

そんなことをいつてはいるが、俺は別に神社に用があるわけでもないのを見抜いているようである。こちらもなんと切り出したらいいか分からなく、迷っているうちに突然、

「怖いものを見たくないかい？」

何かがゾクリと来た。

普通なら気味悪がってそのまま逃げるなりするだろう。しかし、

「勿論。」

この返答が俺の奇妙な体験の全ての始まりだった。彼女はそれを聞くとなにやら微笑んでついてきてと言い自転車にまたがった。自転車まで赤かった。

彼女についていくこと二十分ほど、住宅街のはずれにあるある空き家と思しき場所に着いた。彼女は自転車を降りるとすぐに空き家の

戸に手をかけた。空き家はどこにでもありそうなく普通の二階建ての家で放置されていたためだろうか、庭は荒れ放題で建物には人の生活というものがまったく感じられなかった。周りには通行人はおらず、静かだ。日がでていないのもあって、不気味さはましている。まるで深夜であるような錯覚をうけた。家の前で突っ立っていると彼女がドアの前で手招きしている。入ろうということだろう。家には電気は通ってないらしく、俺の前をいく彼女が持参していたと思われる懐中電灯にスイッチをいれた。明かりがついたが家の中は変わらず暗かった。

「いいのか、勝手に入って。」

俺は一般論をいった。中を見渡しながら彼女は

「いいんだよ。ここはボクの親戚の家なんだから。」

何がいいのかわからない。それを口にしようとすると

「キミもあの神社の御神木を見たよね。あつたろ、釘の跡が。あれをやった人がこの家の持ち主。」

「は？」

「そもそもあの呪いのやり方を教えたのもボクさ。どうしても呪いたいやつがいるって言うから冗談半分で教えてあげただけど、まさか本当に効くなんて思いもしなかったヨ。」

なにかよく解らないことを言っている。呪いが効イタ？

「そう、本当に効いちゃったんだよ。ホントに。呪った相手は交通事故でドカン。呪った本人も怖くなって引きこもりがちになり最後には頭がおかしくなってるまま行方不明。その結果がこの空き家。薄気味悪がつて親戚は処分ができないでいるみたい。」

「ただの偶然だろうに。それに教えるにしてもなんで丑の刻参りなんてもんにしたのさ？笑えない冗談にしか思えない。」

「ただの偶然でも呪った方はそうは思えないのサ。偶然だとは分かっているけど、どこかで恐れてしまっただよ。丑の刻参りにしたのは冗談半分であえて馬鹿みたいなのを選んだの。最初は呪いなんて本当にやるとは思わなかったからネ。」

何があつてそこまで呪いたかつたのかは聞かないことにした。聞いても気味が悪くなるだけだろう。

「まあそうだろうにしても何かいなくなつたことに責任は感じなかつたのかよ。冗談半分でも呪うように教えたのに。それにあれは藁人形が抜かれちゃいけないんじゃないやなかつたつけ？それともなくなつたのはアンタの仕業かい？」

「ボクは何度も言つたサ。呪うのなら自己責任で覚悟をもつてやれ、人を呪わば穴二つとね。その結果失踪しようがボクの知つたことではない。それと藁人形はボクの仕業ではないよ。いくらボクでもあんなものは取らないよ。」

よどみなく俺の質問に答えてくれる。家主がいなくなつたこの家に何があるのだろうか。

「さて、キミをこの家に招いたのはキミの望みを叶えてあげるためさ。」

俺の望み？

「そう、ボクにはわかるんだよ。ボクと同じ種類の人間が。そしてキミがそういうものを見てみたいと、触れてみたいと思つていゝこともね。サア、こつちだよ。」

そついうと彼女は二階に上つて行つた。俺はただただついていくことしかできなかった。

階段を昇り切つて彼女は言う。

「ボクもね、この家にはいつてあれを見るまではこの家の家主もそこまでおびえることはないんじゃないかと思つてた。でもあれが気がついたら家の中にあつたなんてネエ。怖い怖い。」

二階は当然電気はついておらず、まだ4時ごろのはずだが廊下はどこまでも暗く、静まり返つてゐる。黙つていたら暗闇に吞まれそう

だ。

「何があつたのさ？」

「まあ見てごらん。」そついうと彼女は階段から一番手前にあつた

部屋のドアを開けた。

中に入ると部屋は真っ暗だったが、彼女が懐中電灯で照らしたとたん、そこに何かがあるのに気がついた。それは藁でできており、人の形をしている、釘がささった人形がポツンと落ちていた。思わず、息をのんだ。

「いなくなる前に１度だけ会ったんだけど、本人曰く気がついたらここにあつたらしいよ。」

そんなことをいいながら彼女は部屋を照らした。部屋一面に御札という御札がはつてあった。俺は腰がぬけて思わず座り込んだ。彼女は手当たり次第にも程があるよねえといいつつ部屋を見ている。ものすごい悪寒がする。はやくここを立ち去れと頭が命令する。ノ口と体を動かし、部屋を出ようと後ろを見ると、ドアが閉まっていた。

「なあ、ドア閉めたか？」

「いいや、閉めた覚えはないよ。」

それを聞くと俺はすぐにドアを開けようとした。が、案の定ノブは動かない。異常事態を彼女に伝えようとすると、あることに気がついた。人形がないのだ。そんな馬鹿なと思って暗い部屋を見渡すが見当たらない。見えるのは壁に貼られた大量の御札と、こんな事態になってまでニヤニヤ笑っている彼女だけだ。あせってもう一度ドアを開けようとすると

コッーン コッーン

何かが聞こえた。何かを何かで叩くような音。それも俺が開けようとしているドアのすぐ反対側で。完全にパニックになった。頭は真っ白になる。それは釘をドアに打ち付ける音だった。

コッーン コッーン コッーン

だんだん激しくなる。

コツッ コツッ コツッ ゴツ ゴツ ゴツ ゴツ ゴツ ゴツ ゴツ ゴツ
ッ ゴツ ゴツ ゴツ

放心している俺の横で彼女は楽しそうに笑っている。壁をみると音が鳴るたびに御札が一枚づつはがれていく。

ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツ
ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツ
ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴ

バラバラと落ちていく無数の御札。ドアの向こうで鳴り響く音。どちらもこの世の現象ではない。

ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツ
ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツ
ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴ

横で笑っていた彼女は完全に放心状態の俺を見ると、なにやら呟いて思いきりドアを蹴った。すると音は止み、ドアは蹴られた衝撃で開いた。開いた瞬間、俺は我を忘れて部屋を飛び出し、家を出た。家の前に停めた自転車のところで俺は座り込んだ。ただただ呆然としていた。なんだったのだろう。あれは。彼女はゆっくりと家から出てきて座り込んでいる俺の横に立った。

「いやあ、まさかあそこまでひどいことになるとは思わなかったよ。まさかあれを部屋から出ただけであんなになるとは・・・」
どうやら藁人形を部屋から出したのは彼女らしい。なんかぐったりと来た。

「どうだった？初めて“ドア”を開けた感想は？さすがに初めがあ

んなのじゃこたえたカナ？それでもボクと同じ種類の人間は一度は必ず開けてみたいと思うはずさ。」

ドア？何の事だか分らない。

「ドアはいつでもどこにでもある。そのドアは簡単に開けられる。その向こう側は見える人が見ればかなり魅力的なモノさ。ただし、ドアは開けたら必ず閉めなくてはいけない。向こう側のものが出てきてしまうからね。向こう側のモノだってこちら側に来たがっているから。キッチンと閉めなければ、いつかはその代償を負うことになる。ドアは境界だ。こっちと向こうは混ざり合ってはいけない。それでも、この世界にはいくつか開いてしまっているドアがある。この家の家主だってキッチンとドアを閉めなかったからあんなことになったんだよ。」

俺は茫然とそのことを聞いていた。その時はよく意味が分からなかった。

彼女は自分の首にかけていたアクセサリーを一つ外すと、俺にわたしてきた。

「魔除けのアミュレットだよ。お近づきの印に君に一つあげよう。」

ボクの名は葉月霧。以後ヨロシク。」

それは直方体の金属の棒に、七つのそれぞれ違う色の石が並んで埋め込んであるきれいなものであった。俺はそれを力なく受け取ると、
「倉御三笑、以後ヨロシク。」やはり力なく言った。

赤い少女こと葉月霧がこれから先、俺にまたドアを何度も開かせることになる、俺の悪い予感ささやいていた。

壱話（後書き）

徒然なるままに書いたものです。読んでくださってありがとうございます。

式話

赤い少女こと葉月霧にあつた翌日、黒瀬から彼女のことを聞いた。

「赤い少女こと葉月霧は1学年8組出席番号35番文学部所属。俺らと同級生だったな。なんか一風変わった人みたいだけど、クラスでの評判はいいみたい。あと占いやらなんやらそっちの道に詳しく、一部の女子に結構人気があるらしい。・・・聞ってるのか？」

一通り調べてくれたみたいだが、もう遅い。すでに俺は当人にひどい目に遭わされた後なのだから。

「せっかくだが一足遅かったようだ、黒瀬よ。」そう言つて昨日の体験を話した。信じてくれとは言わないが、誰かに話したかった。

よくよく考えると廃墟で女子と二人っきりで何やつてたと言われてもそんなにおかしくない話だったし、言われたくもないので自重していた。この手の話がわかる人じゃないと話すのがはばかられた。

一通り話し終わつた後、黒瀬は爆笑した。

「クラサンらしくないな、そういうものは好きだけど疑り深いのがクラサンじゃないか。葉月さんに見事にだまされたんじゃないの？ いわゆるドツキリみたいな。」

やつとそれだけ言つとまた笑い始めた。まあ我ながら笑い話だと思ふのだが、ここまで笑うだろうか。

「そこまで笑わなくてもいいじゃねえか。確かにあれだけのシチュエーションならドツキリを仕込まれても分らないが、あれは違ふぜ。」

「ほう、でも何かを見たわけじゃないだろ。聞こえた釘を打つ音だつておおかた廊下にスタンバイしていた誰かが流したんじゃないの？一枚づつはがれていったつていう御札だつて何か仕掛けがあるはずさ。今度確認にでもいつてみる？」

黒瀬はいわゆるオカルトというものが好きなのだが、俺よりも懐疑的だ。本人曰くそう簡単にこの世ならざるものがいてたまるかとの

こと。変なりアリストである。

「そうはいつでもね、一度あの異常な体験を試みろ、信じたくなるさ。」

「その手の話は大体が幻覚さ。条件さえ合ってしまえばそう思い込んでしまうんだよ。」

話はこのまま心霊現象についての談義が始った。俺らはもつと真面目なことについて話せないのだろうか。

放課後、例の神社へ行ってしまった。この時初めて知ったが、矢上神社というらしい。案の定、神社にはやはり葉月霧がいた。相変わらず赤一色で服装を統一しており、境内にあるベンチに座って本を読んでいる。こちらに気づくと本を閉じ、片手を挙げて挨拶してきたのでこちらも片手を挙げて挨拶し、彼女の隣に幾分か距離をあけて座った。

「昨日はドーモ。」幾分うらみがましく言った。相手はまるで意に介せず、どういたしまして、と返してきた。黒瀬に言われたのもあって、昨日のことを聞いてみた。

「いやあ、あれは久しぶりにあんな体験が出来たヨ。去年は受験やらなんやらでろくにああいふところに行けなかったからさ。」と、笑いながら言ってきた。

「ドッキリとかじゃないだろうな？もしそうなら本当に拍子抜けだよ。」

「キミも人が悪いなあ。ボクもそこまで趣味は悪くはないヨ。第一あれがドッキリだったとしても、キミが不思議に思えばそれはもうそういう体験なのサ。」

なんだか釈然としない。しかし昨日のことについてはこれ以上聞いても無駄なような気がした。そのため昨日話していた「ドア」とやらについて聞いてみた。

「お前さ、昨日ドアについて話してくれただろ。一度明けたものは

閉めなくてはいけないって。なら、昨日のあれは閉まったのか？いや、そもそも閉めるってどうやるんだ？」

「うん、閉めるっていうのはネ、大抵は勝手に閉まるんだ。本人が納得して安心してしまえば閉じてしまっただけでオシマイ。普通はね。」

よくわからないが、心霊スポットなんかに行っただけでドアを開けて不思議な体験をしても、それは心霊スポットだからこんなことが起きるのだと、無意識に自分を納得させることによって大体ドアは閉まる。こんなことだろうか。

では閉まらない場合は？

「閉まらない場合は大体2つ。ドアの向こう側のヤツがヤバかった場合と、ドアを開けたことを引きずってしまった場合。前者はともかく、後者は何も起こらなければそれでオシマイで、そのうちドアは閉じる。だけど何かが起こってしまった場合がマズい。何かが起こってそれはドアを開けてしまったから、と大抵は思い込んでしまう。ドアを開けたから、じゃ納得はできても閉めることは出来ないんだ。要は自分を安心させることでしかドアは閉めることはできないんだよ。神社なんかに行っただけでお払いしてもらうのも自分を安心させるためだろう？ああいうものは。昨日のボクの親戚なんかいい例だよ。あの人形が人為的にか超自然的にかは知らないけど、彼女のもとに来た時、いや呪った相手が死んでしまった時に何かすればよかったのに。あの人はただ怯えるばかりだった。あんな御札なんて意味はないとボクは散々言ったのに……。」

そういう彼女の顔はどこか悔しそうだった。確かにあの部屋の御札じゃ逆効果だろう。

「彼女がドアを閉めなかったおかげで親戚が気味悪がってあの家もゴーストハウスみたいになっちゃったし、キッチンとしめないとこちらに残り続けるんだヨ。」

「で、閉められたのか？昨日のは。」

「さてね。一応あの人形は回収したし、あとは叔父サン次第だろう。」

ネ。」

聞けばいなくなったという女性は葉月の叔母らしく、あの家は叔母一家が住んでいたという。家から家族がいなくなり、藁人形に思いを込めるような心境とはどんなものだろうか。

「まあドアなんて勝手に開くものでもあるんだけどネ。」

さて、といい葉月は立ち上がった。

「この近くにもう1つ、ドアが開いているらしいところを見つけたんだ。そろそろいい時間になってきたし、キミも来るかい？」

見ると、辺りは夕闇に包まれようとしている。

またあんな思いをするのかと思うと、足がすくんでくる。しかし、好奇心には勝てなかった。

自転車を走らせること15分ぐらいだろうか、旅館のような建物の前に着いた。

「この旅館はネ、女将だった人がお客サンに殺されてしまっただけでずっと放置されて、今にいたっているみたいなんだヨ。」

「まあ心霊スポットの条件はそろっているな。でもどうやってドアとやらを閉めるんだよ。女将さんの幽霊でも供養するのか？」

人が殺された場所はドアとやらが開いてしまうのはわかる。そういう場所だとわかってしまっただけなら、怨霊とかいったイメージを想像してしまふ人はしてしまふ。そうやってしまっただけでもない場所でも“何か”があるように思えてしまふ。そう思えてしまふことをドアが開くともいうのだろう。なにも人が殺された場所だけに限らない。少しでもそう思わせてしまふ状況にある場所もそうなのだろう。そのようなことを言ったら、

「まあ概ねそうだね。でもここには別にドアを閉めに来たんじゃないヨ。勝手に開いてるドアなんて閉めようがないよ。人がその場所で何があつたか忘れるか、その場所がなくならない限りは。」

「じゃあ何をしに来たんだよ。」

「もちろん、ドアを開けに。」

楽しそうに言いやがった。

中に入ろうとすると、門のところに立入禁止と書いてある看板があった。葉月は完全に無視して入って行った。幸い、辺りに人がいなかったので咎められることはなかった。見つかるといういりとなんだよなと思いつつ、葉月の後に続いた。

旅館の中は荒れ放題だった。あちこち落書きがしてあり、ゴミやらなにやらが散らかっている。門が開いていたのは先客達が勝手に開けたのだろうか。先客達はどういった人なのか予想がつくから会いたくない。幸い、中には人の気配は全くなかった。

「こういう散らかり具合は廃墟さがでていいのか、それともひっそりとしている様を壊してよくないのか・・・。」

前に行く葉月がぶつぶつ何か言っている。俺からは歩きにくいとだけ言っておこう。完全に日が暮れてしまったので、葉月は懐中電灯、俺は携帯のライトを付けた。

「お前いつもそのライト持ち歩いてるのか？」

「自転車のライトさ。ハンドルに付けるようなやつ。持ち歩いて便利だヨ。」

建物は2階建てで一階には風呂場と調理場、宴会場といった部屋があった。どの部屋も玄関と同じで荒れ果てていた。散らかり具合とは裏腹に、建物は静寂に包まれている。歩いているうちにだんだん緊張していく。壁のシミや、床の軋む音など、普段より過敏に反応してしまう。黙っていると吞まれそうな場所だ。暗闇が空間を押しつぶしていくような錯覚を覚える。そんな中、葉月はいきなり口を開いてきた。

「恐いよネ、こういう場所って。」

いきなり何を言い出すのだろうか。楽しそうな口調で。

「昔からさ、ボクはこういう感覚が好きでたまらなかったんだヨ。」

従姉に連れられてきたのが初めてだったかな。それ以来この道にどつぷりつかってしまつてネ。」

俺は何だったろうか。この道にはまってしまったたきっかけは。

「あのドア理論だつてその従姉に聞いたんだけど、あれは子供ながら関心をしたのを覚えているよ。あれからいろいろドアを開けてきたけど、どれも楽しかったよ。」

どうやら俺とは感覚はズレているらしい。今更ながら思った。昨日のドアを開けた時、俺はあれだけ怖い思いをしていたのに葉月は楽しんでいたらしい。場慣れいうものなのか。

「ドアを開けることは怖いと思うかい？」

「まだ2回目だから何とも言えんさ。」

実際、怖いと思うが考えるよりも先に言葉が出た。楽しみたいとでも俺は思っているのだろうか。いや、ここに來た時点でそう思っていたのだろう。

「さすが倉御クン、ボクが見込んだだけある余裕ある発言。でもドアの本当に怖いところは・・・」

ドン

2階で音がした。

「行ってみようか。」そういうと葉月は玄関に近くにあった階段にむかつて歩き始めた。

ドン

再び音がした。歩いている途中、上で何かがうごめいているような気配を感じる。2階に上がると、なにか、かなり嫌な感じがした。1階よりも暗闇が濃い感じがする。2階は客間だけのようだ。廊下から、4つのドアが見える。手前から開けてみることにした。廊下の突き当りにある鏡は碎け散っている。

まず1部屋目。

中は相変わらず荒れ放題だった。和室なのだが、畳は見当たらない。脇に見える押入れにふすまが残っているからかうじて和室だとわかる。間違ってもあの中には入りたくない。2部屋目、3部屋目も同じような中身だった。最後の4部屋目の前に来た時、嫌な感覚が体をはしった。

ドン　ドン

「やっぱやめない？」

「何を今更。」そういつて葉月はドアを開けた。

中に入ると他の部屋とそう大差はない。でも、部屋の奥には“何か”がうごめいていた。

「いやあ、これはなかなか・・・。」

そういう葉月の声はわずかに上ずっている。そんなにヤバイのか？ 気がついたら葉月の持っているライトと、俺の携帯のライトが消えている。携帯は電源が落ちている。目を凝らすとうごめいているものの、それは人の形をしているがわかった。

「なあ、あれって・・・」

最初、幻覚のたぐいだと思った。でも、それにしてはよく分からないが質量感がある。

「いや、あれは違う・・・。あれは・・・」

葉月はそういつて固まっている。だが俺はもう気づいている。あれは本当の人間だ。

「逃げる！」そう叫んで葉月の腕を掴み、俺はドアへと走った。確かにあれはこの世に存在する人間だ。でも、その気配はまともな人間のものではなかった。ドアを開けて、部屋から出る時、後ろから追いかけてくるのを感じる。ものすごい早さで。階段にたどり着いた時には追い付かれてしまいそうだった。そこで俺は葉月を先に往

かして、追いかけてくるものを抑えることにした。今では帰宅部だが、中学時代は柔道部だ。それに今でも体は鍛えていたので抑えるぐらいの自信はある。

「無理だよ、倉御くん。あれは常人の目じゃないヨ！」

「それじゃあ2人ともすぐ追いつかれておしまいだろ！」

そんなやり取りをしているとその化け物が掴みかかってきた。ものすごい力だ。それでも、足払いをかけたなら簡単にひっくり返った。そのまま俺は柔道の抑え技で押さえつけた。柔道の抑え技は力だけでは抜けることはできない。それなのに何故か、無理やり抜けられた。

「え、」

にわかには信じられない。今度はこちらが押さえつけられそうになる。思わず、突き飛ばした。“それ”は見事に階段を転げ落ちていった。上からみると、しばらく“それ”はうずくまっていたが、むくりと起き上った。そしてこちらを見上げている。このままでは下に降りられない。どうする。

「2番目の部屋の窓から出る、倉御くん！」

外から葉月の声がする。もう建物から出ているらしい。

「あれは建物から出られないみたいだ！2番目の部屋なら木をつたって下りられる！早く！」

急いで引き返し、2番目の部屋のドアを開けた。開けた先にはもう1人、あれがいるような気がした。当然誰もいない。急いでガラスが割れている窓から木に飛び移り、そのまま塀の上に降りた。玄関口に回ってみると、葉月があれを外から見ている。“それ”は階段下で倒れこんだまま血走った眼でじっとこちらを見ている。確かに建物の外、こちらには来ることはできないらしい。“それ”からは感情を感じることができなく、ただただこちらをじっと見ている。

「警察に電話しよう。あれは確かに人間だ。精神病棟からでも逃げ出してきたのか？」

「それがいいよ。もちろん匿名でね。」

警察に電話し、パトカーが廃旅館に到着するのを離れた所から確認することができてから、やっとほっとすることができた。

「いやあ、初めてだヨ。ああいう場所で生きた人間に会ったのは。」
近くのコンビニに行き、そこで一息つきながら葉月は言った。生きた人間というのが引かかる。

「確かに廃墟には変な人がいるっていうのは聞くけどな。あんなのは反則だ。」

未だに実感がない。あんなのと格闘を繰り広げたなんて。

「かつこよかったよ、倉御クン。惚れそうになっちゃったヨ。」

「やめろよ。いや、マジで。」

「冗談はさておき、本当に助かったヨ。ありがとネ。」

「まあいいってことで。ともかく、やっぱり1番怖いのは生きた人間ってことか。」

「違うよ。」

きっぱりと否定された。

「ドアを開けたら生きた人間がいた、なんてのも確かに怖いさ。でも、本当に怖いのはドアを向こうから開けてくる奴さ。」

そういう葉月の口調はいつもと違っていた。目も、どこか遠くを見ているようだった。俺はその続きを聞く気にはなれなかった。

時計を見ると20時過ぎだった。その日はそのまま葉月と別れ、家路についた。その夜、ニュースを見ているとあの廃旅館について報道していた。どうやら本当に精神病の患者だったようだ。病んだままあの旅館にたどり着き、あの場所に吞まれてしまったのだろうか。やっぱり怖いのは生きた人間だ、そう俺は思った。その時は。

その翌日から俺は放課後、あの矢上神社に行くのが日課となった。
好奇心と、恐怖心を満たすために。ドアを開けるために。

弐話（後書き）

2話です。それ以外の何物でもありません。読んで、楽しんでいただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4894d/>

境界扉-kyokaihi-

2011年1月4日03時08分発行